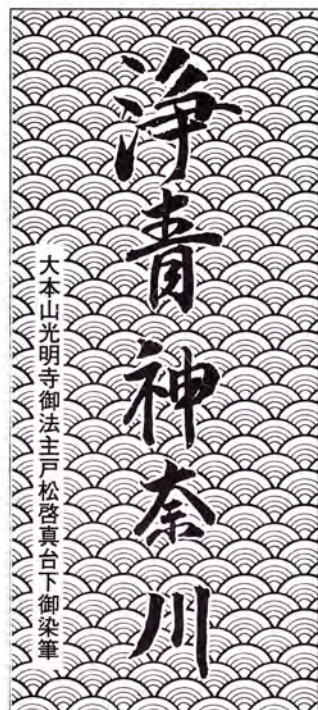




大本山光明寺御法主戸松啓真台下御染筆

神奈川浄青機関紙
第 21 号

発行日 1994年6月1日
発行人 國松俊康

「新たな飛躍に向って……」

第十代神浄青会長

國松 俊 康



で、今は偏に先輩諸氏、会員各位のご支援、ご協力のみを頼りとするところとす。何卒お力添えの程宜しくお願い申し上げます。

この度図らずも、北邨会長のあとを受け継ぎ、第十代神奈川教区青年会会長の重任を拝命することとなりました。いまだに私のようなものが本当に神浄青会長として相応しいのかと言う疑念を払拭しきれないと共に、その重責に戸惑いを禁じ得ません。

さて、周知の通り神浄青は、昨年度に創立二十周年の節目を迎えました。この二十一年間に神浄青は、初代平野会長以来、歴代会長のもと「自行・化他・和合」の活動理念に基づき諸事業を展開し、時には失敗を重ねつつも、様々な成果を得、着実に実績を積み重ねてまいりました。十年をひとつの年代として区切ってみると、神浄青にとって最初の十年は、その基礎を固め、その在り方

そのものを模索していた時代、次の十年は、その基礎・方向性をふまえて更なる発展を目指した時代と言えるのではないのでしょうか。

それでは、神浄青にとって、これからの十年とは如何なるものでしょうか。もちろん今までの浄青発展の礎をより強固なものとし、より素晴らしい神浄青の発展を目指していかなければなりません。

しかしながら、神浄青を取り巻く諸環境は、必ずしも樂觀的なものばかりではありません。内には「活動参加メンバーの固定化」「活動のマンネリ化」等の課題を残しており、漸次解決して行かねばならないでしょう。また、外よりの「浄青のサロン化」等の批判には、反論すべき点はない、反省すべき点は真摯に受けとめ、襟を正さねばなりません。ともあれ、私たちは今新たなスタート台に立っています。青年の柔軟な思考をもって、今我々に何が出来るのか、何を成さなければならぬのかを見極め皆様方と共に今後の神浄青活動の展開を計って行きたいと思っております。

浄青は活動の原動力です。共に歩んでまいりましょう。神浄青の新たな十年の創出のために、何卒会員諸師の若いお力をお貸し下さい。皆様方のご参加を心よりお待ちしております。

平成6年度 神浄青事業計画

- 4月23日 金沢母子寮 花まつり愛のプレゼント
- 4月23日 光明寺 神浄青総会
- 5月9日 光明寺 第1回理事会
- 6月中旬 機関誌発行
- 6月7・8日 神奈川 箱根湯本 第22回関プロ総会並び研修会
- 7月4日 光明寺 開山忌前清掃 奉仕並び第2回理事会
- 7月28日・30日 夏期僧堂手伝い
- 8月下旬 富山 第24回全浄中央研修会
- 9月上旬 光明寺 第3回理事会
- 9月下旬 (三浦浄青担当)
- 10月7日 神浄青ソフトボール大会・懇親会
- 10月7日 光明寺 十夜前清掃奉仕 並び第4回理事会
- 10月14日 光明寺 十夜法要手伝い・十夜街頭伝道 (港北・港南担当)
- 10月下旬 茨城 第12回関プロソフトボール大会
- 12月中旬 光明寺 第5回理事会
- 1月25日 光明寺 別時念仏会
- 2月 第20回全浄代表者研修会
- 2月下旬 他宗派見学
- 3月下旬 第6回理事会
- 光明寺 第7回理事会

総会報告

平成六年度神浄青総会は、四月二十三日（土）午後二時より大本山光明寺に於いて開催された。

開会の辞に続き、北邨会長との挨拶では、二年間の任期を大過なく全う出来たことに感謝の意を表した。

議長に戸松師を選任し議事にうつった。平成五年度事業報告、会計報告、監査の日比野師より適正との会計監査報告があり、承認された。

次に、今年度は役員改選のため北邨師より新会長・副会長の発表があり、続いて承認された。

新会長の國松師より新執行部の発表があり、続いて、前会長の足跡を踏まえて邁進することを誓い、また6月に控えた関東ブロック研修会について触れ、実行委員長の前邨師はじめ、会員が一丸となって全力を尽くし、成功に導くよう各位に協力を促した。

次に、平成六年度の事業計画、予算が発表され、承認された。

次に、加行成満者十六名の発表があり、戸松御法主御染筆の色紙と浄青袈裟を贈呈。終わりに副会長の杉浦師より閉会の言葉があり、総会は終了した。

平成六年度 神浄青役員名簿

副会長	國松俊彦	事務局長	杉浦智徳	書記	富田浩雅	監事	当間浩昭	編集委員	玉木弁生	編集委員	成田善俊	編集委員	北邨賢敏	編集委員	古原良雄	編集委員	永原道雄	編集委員	新原千春	編集委員	夏見裕貴	編集委員	小井英弘	編集委員	石井和弘	編集委員	樋口芳宏	編集委員	宮林雄彦	編集委員	平元正法	編集委員	石川和弘	編集委員	石川覚順	編集委員	山沢敦浩	編集委員	野口浩晶	編集委員	曾我高順	編集委員	新原千春	編集委員	渡部俊賢	編集委員	高麗清貴	編集委員	吉水祥史	編集委員	宮正真光	編集委員	柴田幸博
-----	------	------	------	----	------	----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

組だより

《京浜組》

京浜組浄青は昭和五十二年十一月十二日に発会以来、十八年目に突入しようとしている。現在正会員は十名、平均年齢三十一・八歳であるが、新会員の加入は当面期待薄である。また、昨年から賛助会員の制度を設け、吉岡了泰・林田真成・伊藤光史・森本祐康・野呂幸忍（誕生順）の五人に名を連ねて頂いた。次期のスタッフは、会長佐々木敬易・事務局長陣川隆行・書記林田康順・会計白石隆弘である。事業としては、今年度から在家五重相伝の実施を最終目標に据えた研修会（講師・成田光俊上人）を行っていくことになった。慶事として、平成五年十月二十六日白石隆弘君・充子さんの結婚式が、成田光俊上人戒師のもと自坊にて、また平成六年三月二十七日水谷知靖君・克枝さんの結婚式が、宮林昭彦上人戒師のもと自坊にて行われた。

《港北組》

今年度よりメンバーが十五名となり一段と組の活動が盛んになってきました。昨年度の「脳死」研修会と

は趣向を変え、今年度は「お別時」と「法式」の二本立てによりほぼ毎月一回の割合で実践することとなりました。「お別時」は龍雲寺と大蓮寺に於て夏・冬計二回、又、「法式」は講師に港南組塩沢智彦上人をお迎えし、宗忠寺、泉谷寺、大善寺、専念寺の会処にて計四回行いました。テーマは、袴・如法衣・七条の着脱、酒水器、行道そして音声の一部が中心でした。会員一同皆実践してみると慣れてないせいか難しさを感じながらも結構喜んでいました。さらに港南組主催の「布教研修会」にも二度参加させて頂きました。

《港南組》

この四月で発足以来十七年を迎える当会は、十六名の会員・十一名の賛助会員で構成されております。年間の活動としては、布教研修会（講師土屋光道先生）、鎌倉組と合同の法式研修会（講師津田徳翁先生）を柱として「少年少女婦敬会」、歳末助け合い募金、港北組との親睦会、機関誌「港南浄青」の刊行等をおこなっております。特に「少年少女婦敬会」は、会員寺院を会所とし、運営にあたるスタッフはもとより戒

師・教授師・講師も当会の会員・賛助会員でおこなっており、毎回それなりの成果をあげています。帰敬会に限らず活動全般について言えることですが、小さな組織ですので単独で大きな事業をおこなうことはできません。しかし、逆に小回りの利くという利点をいかして今年も活動してゆきたいと思っています。

《高座組》

ここ数年取り組んでまいりました。会員相互の親睦や意識拡大を催し進めることにより、行事にも積極的に参加出来るようになりました。

中郡組との親睦会をはじめ、真源寺御住職・瀬高哲朗上人が唱導師を務められたときのお手伝い、神浄青二十周年記念ソフトボール大会等、それぞれに一応の成果を上げることができました。

しかし、残念なことに他組のような研修会等の活動をするまでには至っておりません。

今年度の活動の目標といたしましては、より一層の向上をめざし、行事、大会等の参加はもとより、自己研鑽の為に、法式講習会や仏教全般の知識を高め、浄青活動を充実し、諸先輩方が築いてこられた伝統を継承しつつ、会員一同、一丸となって大いに活動して行きたいと思っています。

《鎌倉組》

現在役員以下会員十七名。かいつまんで書くとうる。さて活動内容とはというと少々心もとない。何故ならば、組独自のものがなく、また何をやるにも他組の浄青会員の助力なしには在続が危ぶまれる状態だからである。活動としては港南組と合同の法式講習、三浦組と合同の托鉢行（歳末助け合い募金）があげられる。だが近年新たな会員も加わり、活性化の兆しが見られる。前玉木会長は、会員の親睦を深め、横の結束を固めることを急務とし、一泊研修会及び懇親会を企画した（懇親会での「体育系のノリ」は特筆）また本年より恒例となった十夜引声の研修会は、マンツーマンの指導で緊張感の下充実したものとなっている。なお國松氏が今期県浄青の会長に就任し、そのバックアップも含め組活動は益々その重責を担うこととなる。

《三浦組》

平成五年度に行った三浦浄青の大きな活動は、七月のバーベキュー大会・十二月の鎌倉浄青と合同で行った「歳末助け合い」の為の托鉢・十二月と三月の定例総会、そして二月に行った参加者十二名から成る台湾

への仏跡地巡拝旅行等でありました。平成六年度は、会員の構成が正会員が十六名、そして賛助会員（四十四歳から五十歳までの元会員）が六名からなり、例年通り七月にバーベキュー大会・十二月に托鉢・そして年二回の総会が活動計画として決まっております。その外にも各種研修会等を随時行なおうという案もあります。ともかく、県浄青に協力しつつ、会員の資質の向上と教化の為になる活動を模索し、そして会員相互の親睦をより一層深める様な活動を、時間を調整しつつ、楽しくやっていきたいと思います。

《中郡組》

去る、四月十日（日）大松寺に於いて本年度定期総会が開催された。本年度は役員改選に当り慎重審議の結果、会長一真光、副会長吉永英之、宮澤正恭、会計齊藤良典、事務局池田敬道の各氏が選出された。事業計画では、会員相互の「和」をより一層深め、家族親睦会、他組浄青との連絡協調及び組等の主催する事業への協力参加などを予定している。尚、新入会員として、晴雲寺・塚田勝宣君、知足寺・相馬正寛君、靈山寺・驚見宗信君、浄信寺・吉田健一君が入会、今後の活躍を期待するところである。また、現在新入会員を含め

会員数が総勢二十一名という、今までにない大所帯となり、日比野会長並びに諸先輩方が築き上げてきた中郡組浄青を更に発展させるため、会員一丸となり前進して生きたいと思っています。

《小田原組》

神奈川教区青年会の役員改選も無事、総会において了認され、新体制のもと、スタートされましたことをお慶び申し上げます。これからの益々の活躍を衷心より祈念申し上げます。さて、小田原浄青も期を同じくして役員が改選されました。教区青年会共々、フレッシュな気持ちで組青年会を運営してゆきたいと考えております。さて、今年の組青年会の活動計画としては、歴代諸氏の意志を継承しつつ、自己研鑽を中心に進めて参る所存であります。それを実行するに当り、新たな試みとして、小田原組のみの活動にとどまらず、他の組との交流・親睦をかねた研修会にしたいと思っています。もちろん今日の小浄青の基盤を作られた諸大徳・OBの方々とも、これからの浄青活動を如何にすべきかの意見を頂きつつ、浄青活動を展開してゆきたく存じますので、皆様にはどうぞよろしく、ご支援・ご協力賜りたくお願いいたします。

祝 20周年記念ソフトボール大会



— Yokohama Stadium —

今日は、いつになく寝つきが良くない。普段なら床に入ったか入らないかの内、深い眠りにについている自分なのに……。明日は待ちに待った横浜スタジアム。天気予報はテレビ・新聞を穴のあく程みて、安心してはいるのだけど、果して無事出来るだろうか。手落ちはないだろうか。進行マニュアルを頭にたたき込んだつもりでも、不安が先行してしまう。何度も何度も寝返りを打ちながら、浅い眠りの中、朝を迎えた。

いつもなら、床を出るのに数十分かかる。ところ今日はちがう。目ざまし時計が鳴るやいなや、飛び起きてしまった自分が不思議。まっ先に外の天気を見る。空気は冷たいが、みごとに快晴。空気の冷たさが、かえって自分の気をひきしめてくれた。いつもなら、寒さ冷たさに嫌悪感だらけの僕も今日は感謝！の一言につきる。アア南無阿弥陀仏。

早々に着換えを済ませ一路スタジアムへの車上の人となった。思った程の渋滞もなく、早々と到着。自分のせつかちさ、気の早さは人一番だと自負していたが、上には上がいるもの。すでに数名の会員が来ていてくれた。先のりお手伝いスタッフである。心強いと同時に本当にありがたい。本日二度目のシェイ、シェイ。(ここは横浜、中華街そば)

先のりスタッフの手際良い準備の

おかげで仕度も無事完了。あとは開会をまつのみ。バックスクリーンには電光掲示も輝き、気分も盛り上げて来た。さあ、開会式。そして、森教区長の始球式でプレーボール。三面に分れて、各組総当り戦の始まり。ここまで来れた安堵感からか、急に眠くなってしまった。ちようど良い日差しのおかげも手伝って、のんびり野球見物気分になってしまった。しかし、季節は冬。試合時間を守ってゆかないと、決勝戦には陽が暮れてしまう。自分の気を引き締めて、皆に協力してもらう様、促さなければ。気が付くと、広い広いスタジアムの中を走り回る自分がいた。大きな体が右往、左往して、熱心にプレーしていた皆様に多大な迷惑をおか



けし、申し訳ありませんでした。誌面をかりてお詫び申し上げます。

さて、予選リーグも皆様の協力の甲斐あって、ほぼ時間通り済みますことが出来た。予選八チームの内、決勝戦進出チームは、なんと京浜組と中郡組となった。京浜組さんには申し訳ないが、誰も予想してなかったのではないだろうか？そして、このあと、アッとおどろくドラマがまわっていたのです。

決勝戦は、今大会最大の見せ場。我々スタッフが一番気を使ったところ。センター電光スコアボードに、スターティングメンバーを表示すると共に、アナウンス嬢による、選手紹介をする。気分は、ベ이스ターズ選手気分？になってくれたでし



ようか？さて、先に書いたアッとおどろくドラマですが、さすがに決勝戦らしく、緊迫した中で試合が進んでゆきました。そして最終回の七回裏、リードされての京浜組最後の攻撃を迎えました。このままサ拉里と終る。誰もがそう考えていたと思います。ところが、最終回に京浜組が同点に追いついたのです。この強さは、本物だと皆が口々に言っています。そして、一打あれば逆転サヨナラゲーム。本当にすごい決勝戦になりました。そして、出たのです。その一打が、逆転サヨナラゲーム。みごと京浜組の優勝です。京浜組すばらしいです。皆も信じられないと言った表情で優勝を喜んでいます。本当におめでとうございます。中郡組



の皆も本当に良く戦ったと思います。スポーツマンシップに乾杯。神浄青も終了し閉会式を迎える頃、夜のどばりがスタジアムを包んでいた。

このあと、場所を中華街、華正楼に移し表彰式と懇親会となる。

心地よい疲れと、熱戦の余韻がまださめやらぬ中、懇親会が始まった。神浄青発足20周年記念大会を今日迎えるに当り、神奈川教区長、光明寺執事長を始め、歴代の神浄青会長がごぞつて出席を頂いたことは、筆舌に尽し難い感激である。多くの祝辞の中で、神浄青への期待を込めた叱咤激励の言葉を深くかみしめると共に益々気の引き締まる思いがした。宴も佳境に入った頃、先のソフボール大会での優勝チーム表彰と、各賞の発表及び各組のメンバー紹介が行



われた。中には、大変楽しいパフォーマンスを演じてくれた会員もいて、宴に益々の華を添えてくれた。神浄青の「和合」は固い。

今回は、若い浄青会員の出席が多く見られた。今後、彼らに期待を抱く処は大きい。そう言った意味での今回のイベントは、大いに成功であり、明るい光明が見えた様な気がした。宴たけなわの中、時間も迫り、お開きを迎える頃となって来た。

この大会をお開きにするに当り、百名に及ぶ会員の参加、並びに多くのOBの方々、ご来賓の皆様に来て頂いたことは感無量であった。本当にありがとうございました。

(記) 田辺裕誠



終末医療の現場

“ホスピス”訪問

京浜組 慶岸寺 林 田 康 順

去る二月十六日、青年会は他宗団見学の一環として、ホスピス「ピースハウス」を訪問した。周知のようにホスピスとは一般の病氣とは異なり、積極的な治療を望まない患者、主に末期ガン患者の症状の緩和や疼痛などのケアにあたる施設である。

私たちは、ピースハウス訪問前に小田原組西念寺（北郷謙順住職）にて、横浜市東神奈川高野山真言宗能満寺住職、菅沼大覚上人より、ターミナルケア全般についての講義を受けた。上人は、各種の講演会に百回を越えるほど自身で足を運ばれ、僧侶有志で自治布教団を結成されるなど多彩な活躍をされている。また、ピースハウスなどでホスピスボランティアをして実際に患者さんたちの身の回りの世話もされている仏教者として数少ない実践家の一人である。上人は、おだやかな語り口の中にも、豊富な資料とご自身の体験を裏付けにして、仏教教団などのターミナルケアの現状、ボランティアの意義などについて分かりやすく感銘深い話をされ、何よりも僧侶一人一人の意識を覚醒し、それを高めてゆく必要があることを力説された。



講義の後、私たちはピースハウスに向かった。ピースハウスは、わが国初の独立型ホスピス（建物すべてが、ホスピスのみを目的として作られている）で、緑豊かな敷地に地下一階、地上二階の建物が立ち、二十二の病床が設けられている。そこでは、チャブレン（患者の宗教的・精神的カウンセリング全般を担当する）の斎藤武先生が、熱のこもった講義と詳しい施設案内をしていた。牧師の斎藤先生は、わが国の



ホスピス設立の草分け的存在で、ホスピス教育研究所のディレクターでもあられる。講義では、ホスピスの由来（もともと宗教家が医師の役目を果たしていたこと）、現在の病院の不備（末期患者に対する配慮の不足、諸外国とのホスピス設置の格差）を前置きとされ、ピースハウス設立の経緯（長年にわたり多くの方に寄付を募り約六億円を集められたこと）、宗教者としてのチャブレンの仕事の意義（相手が何を望んでいるかを素早く判断することの大切さ、適切な宗教的ケアの困難さ）、私たち仏教者への期待（四苦八苦などの教義、伽藍・檀信徒の活用）など、実に奥の深い講義を受けた。そ

の後、患者さんのプライバシーに触れない範囲で施設を案内していただいた。ピースハウスの病室のほとんどは個室で、各部屋からベットのままだ庭に出て風に触れられる。緑を愛で、自然の風を感じることはとても重要であるという。食堂も綺麗で、廊下の各所に絵や花が飾られ、ミニキッチン・談話室・ラウンジ・音楽室・家族宿泊室などが完備されている。施設はすべて患者本位に設計され、全く病院の雰囲気はない。時には廊下で小さな店が設けられ、自由なショッピングができる。買い物をするということも患者さんにとって大切であるという。施設は、チャブレンをはじめ医師・看護婦などの充実したスタッフと、多くのボランティアによって運営されている。しかし、こうした施設は、現状の医療行政とかげ離れ、その運営は容易ではなく、多くの浄財がその支えになっているという。

私たちは、ピースハウスの行き届いた施設やスタッフの充実に感嘆し、また、宗教者としての斎藤先生の真摯な姿勢に敬意を抱くと共に、先生が青年僧侶に対して強い期待を寄せられ、私たちを静かに啓発していただいたことを胸に刻み込みながら、ピースハウスを後にしたのである。

戸塚、鎌倉念仏行脚

三浦組 不断寺 杉浦 定徳

念仏行脚の追憶

歩き始めなければ

何も起こらない

歩き始めなければ

誰もついて行かない

歩き始めなければ

おもしろくない

時の神浄青会長北邨賢雄氏の『念仏行脚』参加への呼び掛けである。



ただ「歩き始めなければおもしろくない」と言う理由だけで、二十数名の浄青会員を道連として、戸塚から鎌倉光明寺までの二十キロにもおよぶ道のりを歩かせたのである。

その日、五月晴れの空はどこまでも青く、木立を抜ける緑の風が、私を戸外へと誘った。その時私は、自分が本来夜行性でない事を改めて認知した。

本当は何処かへ行ききたかった。風に自分を委ねたかった。しかし、無情にも私は結婚以来、使途不明時間を認められていない。管理家庭の検閲をクリアするために不本意ながら『念仏行脚』を利用したまでであった。

光明寺に着くと、役員という足枷を引きずって来た者、医者から歩くように勧告を受けている者、マインドコントロールされ会長を「司教さまあ」とお呼びしている者など、様々な動機で会員が集まっていた。何れにせよ、「歩き始めなければおもしろくない」と言うのは、単なる我がまま的発想のように思われる。

光明寺に参集した一行は、鎌倉駅より電車にて、出発点である戸塚の清源院へと向かった。沿道もさるこ

とながら、闖入者を迎え入れた車内に訝しげな空気を醸し出した事は言うまでもない。盆踊りのヤグラよりオタチ台とやらが注目を集める今日の世相にあつて、網代傘に黒衣姿の一人が、世間の目にいかに映つたであらうか。見上げたもんだぜ屋根屋のフンドシか、或は招かれざる何処ぞの訪問勧誘団体か、その真意の程は知る由もない。

「歩き始めなければ何も起こらない」。確かにそうだと思う。私の娘は歩きだしたが為に階段から落ちた経験を持つている。しかし、今回の『念仏行脚』では特筆するような事は何もなかった。(そこに原稿を依



頼された者の苦悩がある)さて、本論に入ろう。

今回の企画は、北邨氏が以前から暖めていたものであり、氏が神浄青副会長の頃、執行部会の席で既に提案していたものである。題して『神奈川横断念仏行進』。川崎から箱根まで歩いてしまおうと言うもので、「お風呂からお風呂まで」と言うサブタイトルまで付いたが結局却下された。氏は機の熟すのを待った。そして会長に就任。一気に我がままを通したのである。太宰はメロスを走らせ、会長は会員を歩かせた。机上の空論より実際の行動に出た。この事に私はエールを送りたい。

現代社会は今、多種多様の問題を抱えている。仏陀の教えが全世界の平和と幸福を願うものであれば、我々はその一つ一つの問題に目を向けなければならぬし、同時に動かなければならない。北邨氏の言わんとするところは、この点であると私は解している。まさに「始めなければ……」なのである。

今、神浄青は関プロへ向けて奔走している。テーマは『安心・生命の尊さと心の安らぎ』。我々に求められているもの、我々の成すべきものを見つけ出し、そして一歩でも二歩でも歩き始められたらと思う。多くの道連と共に。

あの人は今

私的浄青回顧録

香川 隆 敬



組の中に青年会を発足しよう。そんな話が急に湧き出て事務局を引き受けてしまったのが始まりだった。どんな組織かもよくわからないまま、ガリ板に趣意書や入会を呼び掛ける文章を削りいれていたのをおぼえている。

当時をふりかえると、長女が誕生し自坊に腰を据えたものの住職のアシスタントとしての毎日で、実際僧侶としてどう生きていこうかなどということは考えていなかった。ただこのままではいけないと、漠然とした思いはあった。そんな時でもあったので渡りに船だったのかもしれない。里見会長、高島・石川（到）副会長という同年輩の布陣もうれしかったし、また神浄青の年齢制限は四十歳であったので、それとはべつに現組長の石川上人をはじめ多くの先輩諸大徳が、その年齢をこえて港南

青年会の会員として参加してくださったのも有り難かった。昭和五十二年九月、神浄青が発足して四年目、ともかくも港南青年会の第一歩はスタートした。

最初に神浄青に出向した印象は強烈であった。二代柴田会長が提唱された、「自行・化他・和合」の目標理念にそって事業がもろこまれている。事業ごとに理事会が設定され熱心な討議がなされる。理事会のメンバー全員が四十歳に近い叔父さん（失礼）達で、二十九歳であった私は手を挙げることもできないでいた。しかし、会議が終わると和気霽々。先輩僧が熱く語る浄青の夢や未来に胸躍らされていたのを、昨日のこのように覚えていてる。

この年には、早くも誘われるままに沖繩の袋中寺での関プロ主催「戦没者三十三回忌慰霊法要」、大本山光明寺での「十夜念仏行進」に参加した。この日の初夜法要の式衆として「引声念仏」も知らないまま初出陣していた。エピソードをあげれば切りがない。よく学び、行動し楽しんだ（そしてよく飲んだ）。

昭和五十六年、四代里見会長に要請され事務局に。昭和五十九年には里見上人が全浄の理事長となられ、高島・伊藤両師と共に内局のスタッフとして全国を飛び回る事になる。その任の重さに、知恩院での総会の

あと熱を出し一人で帰ることがあった程である。

里見理事長のもと、宗祖生誕八百五十年を期して「一泊布教研修会」、戸塚の公会堂に檀信徒を招き「法然上人御生誕八百五十年を讃える集い」画し、あの「音楽法要」を教化に生かすべく町に飛び出した。再任された五十八年は、十周年を迎えて大事業山積みとなった。

「創立十周年の集い」と銘うって「横浜スタジアム」を貸し切ったのソフトボール大会と、OBを招いて中華街での祝賀会。初代平野会長を名誉団長に迎えての「ビルマ仏跡巡拝」を敢行。そして、記念誌「十年のあゆみ」の発刊と会員とOBが一体となり次々と成功させることができた。また、同行した全日仏青の佐藤師と彼らが集めたユニセフの夜間小学校建設資金（五万ドル）をビルマ側に直接届けたことも特記したい。

神浄青の会長も、野中・野呂・戸松・小松崎・北邨上人へと受け継がれ、二十周年を迎えた。その間、野呂上人が関プロの理事長に就任されるなど若い力が台頭し、興隆・発展のさまを目のあたりにするが、残念なことには会員任期は平成二年に終わってしまった。

振り返って、里見師に引きずられての事務局畑一筋の私であったが、ガリ板から日本語タイプ、ワープロ

からパソコンへと事務機も発達を見、今、自坊の檀信徒への通信に役立てている。また、浄土宗の教義・宗務の仕組や、法式・布教など僅かであるが学ぶことができた。神奈川は基より関東一円、そして北海道から沖繩まで沢山の旅をし、友達も増えた。神浄青の会員は、今でも皆仲間であると思っている。

光る 光る すべては光る
光らないものはひとつとしてない
みずから 光らないものは
他から 光をうけて 光る

坂村真民・詩

阿弥陀様のお導きと、指導してくださった諸先輩・同輩に心から感謝したい。二十周年を迎え、会長は北邨上人より国松上人に。若い力を結集し、勇気を持って益々の研究・研鑽に励まれ、物質文明に溺れる世の中を「社会浄化」を旗印に、一人一人が光り輝く浄青会員になられんことを期待したい。

合掌

編集後期

Nさん、まじっすか、
いいっすか、
だいじょうぶっす。(E・K)
Nさん、これでいいすか。
もうカンペンして下さい。

(W・I)